The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語複合名詞の意味解釈メカニズム
Author(s)	由本, 陽子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 79-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57354
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語複合名詞の意味解釈メカニズム*

由本陽子

1. はじめに

語構造は原則として二股構造であり、また、語内には二つの構成素の関係を示す機能範疇も存在しない。したがって、複合語の意味は、それが生産的な規則に基づき形成されたものである限りは、構成素である二つの単語の意味を何らかの操作で合成して導かれると考えられる。本稿では、動詞連用形を主要部とした複合語も含め、多様性に富んだ日本語の複合名詞の意味解釈について、先行研究には見られない新たな観点も加えてそのメカニズムを整理し、これまであまり試みられてこなかった全体像を捉えることをめざす。

一般に、複合語の意味関係には、主に①修飾関係(Modification) ②叙述関係(Predication) ③並置関係(Apposition) の 3 つのタイプがあると考えられている(cf.Spencer 1991, Lieber 2009, Scalise & Bisetto 2009)。これらは、日本語の複合名詞の例でいえば、それぞれ以下のような関係性である[1]。

(1) a. Modification　青空 = 青い空、春風 = 春に吹く風
　　b. Predication　狐狩り= 狐を狩ること、日暮れ = 日が暮れること
　　c. Apposition　親子= 親と子、 飲み食い = 飲んだり食べたりすること

このうち、並置関係の複合は日本語では語彙化されたものがほとんどで、生産性がないと考えられるので、本稿の考察の対象外とする。次節では、まず修飾関係型について生成語彙論 (cf. Pustejovsky 1995) の手法を用いた分析を紹介し、3 節では叙述型をとりあげ、日本語特有の性質に焦点をあてて論じる。4 節では、日本語の複合名詞の解釈において重要な役割を果たしていると考えられる(1)以外のメカニズムがあることを指摘し、それが日本語複合名詞の多様性を生み出していることを述べる。5 節は結語である。

2. 複合名詞における修飾関係

主要部が名詞で修飾関係によって複合語が形成されている場合、その修飾関係は以下に示すように実に多様性に富んでいる。(cf. 影山 1993:194)

(2)　a. 様態、様子：石頭、イワシ雲、獅子鼻、烏口、菊皿

* 本稿は、平成 27 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）(＃24520427）の助成をうけた研究成果の一部である。

[1] 修飾関係を attributive、叙述関係を subordinate、並置関係を coordinate と呼ぶ場合もある。

b. 原料、材料：紙箱、硝子戸、砂袋、縄梯子、肉団子

c. 場所／時間：脇腹、外堀、庭石、春風、夜道、夏風邪

d. 目的：雨靴、茶道具、天ぷら鍋、ケーキ皿、荷車

これらのいわゆる一次複合語の意味解釈は、このような多様性と慣用性から、長く語用論の問題として扱うしかないと考えられていた。しかし、母語話者は初めて耳にする複合語であっても、構成要素となっている単語についての世界知識によってある程度正しい意味を予測することができるという事実を見逃してはならない。たとえば、我々は「革靴」と「雨靴」とでは、「靴」の材料や目的についての知識によって、二つの名詞の意味関係が異なることを理解することができる。すなわち、「革」は「靴」の材料となり得る素材なので(2b)、「雨」はその用途に関わる情報を与えているので(2d)に分類される。

このような個々の単語についての世界知識の形式化は生成語彙論によって大きく前進し、Pustejovsky (1995) が形容詞による名詞の修飾関係を説明するメカニズムとして提案した Selective binding（「選択束縛」）を援用し、複合名詞の解釈をクオリア構造を用いて導く分析が提案された（Johnston and Busa (1996) 、影山 (1999)など）。クオリア構造とは、(3)に示す４つのクオリアによって単語が表す概念にまつわる百科事典的知識も含めた意味を形式的に表したもので、名詞については以下のように規定されている。（cf. 小野 2005:24）

(3) a. 形式クオリア(Formal Qualia) 外的分類：物体を他の物体から識別する関係

b. 構成クオリア(Constitutive Qualia) 内的構成：物体とそれを構成する部分の関係

c. 目的クオリア(Telic Qualia) 目的・機能：物体の目的や機能

d, 主体クオリア(Agentive Qualia) 成り立ち：物体の起源や発生に関する要因

Selective binding とは修飾要素が被修飾要素のクオリアから適切なものを選択してその内容を特定する形で修飾関係を結ぶことで、たとえば、「はやい車」では、「車」の目的クオリア内の情報「人や物を輸送する」について、「はやい客」では、「客」の主体クオリアに記されている「店に来る」について、それぞれ「はやい」が修飾関係を結んでいる。Johnston and Busa (1996) や影山(1999) は複合名詞に同様の分析を適用することを提案した。たとえば、(2a)では非主要部が主要部名詞の形式クオリアを選択し形状や属性の情報を追加しており、(2d)では目的クオリアを選択し名詞の用途を特定している。複合名詞の非主要部が形容詞の場合は、先述の名詞句内での形容詞による修飾と全く同様に名詞のクオリア構造内の物体の属性自体（形式クオリア）以外に、その物体が使用される事象（目的クオリア）や成り立ちを表す事象（主体クオリア）について形容詞が副詞的な修飾関係を結ぶことが可能である。たとえば、「長靴」「軽石」などはまさに物体の属性を表すと言えるが、「早霜」において「早い」が特定するのは「霜」の属性ではない。「早霜」とは、『広辞苑（第六版）』によれば「秋、普通よりも早くおりる霜」である。「早い」はこの「霜」の成り立ちを表す事象、すなわち主体クオリアについて季節を特定化しているのである。

いっぽう、主要部が動詞連用形の場合の修飾関係については概念構造（LCS）による分析が有効である。そもそも動詞のクオリア構造の捉え方が研究者間で異なり、どんな情報

をどのクオリアに記述するかについて統一的見解がないということもあるが、いずれの立場にせよ、動詞のクオリアに記される情報はLCSによる語彙分解に基づいているので、結局クオリアを用いてもLCSを基盤とすることに変わりはない。たとえば、「黒焼き」と「手焼き」について考えれば、前者では「黒」が「焼く」の結果状態を特定しているのに対して、後者では、「手」は「焼く」が表す行為の手段を表しており、両者の違いは基体動詞の LCS 中のどの下位事象に修飾要素が言及しているかにある。動詞の意味を構成する原因事象や結果事象をどのクオリアに表記するにせよ、このような差異は、Sugioka (2002) が主張するようにLCS内のどの述語が修飾対象かにより区別するのが適切である。これも一種の選択束縛である。Sugioka (ibid.)では、動詞連用形がもとの V の LCS を受け継ぐことが前提とされており、(4)に示すように、各例の下線部の修飾要素がそれぞれの意味関数で表される下位事象を特定する情報として付加するために複合語が形成されると考えられている。

(4) a. $_{Event}$[x ACT (ON y) Manner / Instrument]　　一人早歩き/水洗い（する）

b. $_{Event}$ [BECOME y Cause / Manner $_{State}$[BE y AT-Z]]　　日焼け/犬死に（する）

c. $_{State}$ [BE y AT-Result]　　黒こげ/四つ割り（だ／の）　　(cf. Sugioka 2002)

(4)の 3 種類の複合名詞は、「する」と結合して他動詞となるもの、自動詞になるもの、そして「だ」と結合して述語名詞として用いられるものに区別される。これらの統語的な差異も、Sugiokaによれば、結合する付加詞が V の LCS 内のどの下位事象を修飾するかによって説明される。すなわち、(4a)の様態（「一人」）や道具（「水」）を表す付加詞は、LCS 内の働きかけを表す ACT にかかるものなので、行為を表す動名詞を作るのに対して、(4b)の原因を表す「日」や変化の様態を表す「犬（のように）」は変化を表す BECOME にかかるので、状態変化を表す動名詞を作る。いっぽう、(4c)の「黒」や「四つ」は結果状態を表すので、LCS 内の State の Result として挿入され、状態を表す述語名詞となるのである。

以上をまとめると、修飾関係によって構成されている複合名詞は、主要部名詞の意味の中のある側面について非主要部が情報を付加することを目的として形成されているのであり、その解釈メカニズムは、主要部名詞のクオリア構造の中から適切なクオリアを選択し左側の語の意味を合成するプロセスとして捉えることができる。さらに、主要部が動詞連用形の場合には、もとの動詞の LCS を用いることによって、複合名詞の意味をより明確に記述できるだけでなく、複合名詞の統語的性質をも説明することができる。

3. 複合名詞における動詞連用形主要部の叙述関係

動詞由来の複合語のうち、いわゆる「複雑事象名詞(complex event nominal)」(cf. Grimshaw 1990)において、基体動詞の項構造がどのように具現されるかについては、1980 年代からいくつかの提案がなされているが、なかでも以下のような Selkirk (1982) による First Order Projection Condition による一般化が良く知られている。

(5) All non-SUBJ arguments of the head of a compound must be satisfied within the compound immediately dominating the head. (Selkirk 1982:36)

これは英語の生産的な動詞由来複合語（V-ing, V-er, V-en などを主要部とするもの）の内部に主語が現れることが容認されないこと、また、基体動詞が項を 3 つ以上とる場合は複合語が形成できないことを説明するものであった。しかしながら、この条件は日本語の動詞連用形を主要部とする複合語については不適当だと言わざるを得ない。Kageyama (1985) によって指摘されたように、第一には、(6)に示すように、主語との結合について、日本語では英語と異なり容認される場合がある。他動詞や非能格自動詞においては、英語と同様主語との結合が容認されないのに対して、非対格自動詞、すなわち、内項主語をとる動詞が主要部の場合には、自然現象を表す複合名詞が多く存在しているのである。

(6) a. 他動詞：*（工作の）親作り（＝親が工作を作ること）、*（園児の）母送り（＝母親が園児を送ること）、*（猪の）猟師殺し（＝猟師が猪を殺すこと）

b. 非能格自動詞：*子供遊び（＝子供が遊ぶこと）、*犬吠え（＝犬が吠えること）
*鳥鳴き（＝鳥が鳴くこと）

c. 非対格自動詞：地鳴り、地割れ、地響き、地滑り、雪解け、崖崩れ、胸やけ、ガス漏れ、日照り、耳鳴り

Kageyama (ibid.)によれば、古英語・中英語やオランダ語においても日本語と同様非対格動詞が内項にあたる主語と結合した複合語が存在し、Selkirk の「主語(SUBJ)」という文法関係による一般化は普遍的とはいえない。むしろ(6)の観察に従えば、項構造を基盤とした一般化、すなわち「動詞由来複合語内には外項が排除される」とするのが妥当だと考えられる。英語について主語が複合語内に現れないという先行研究による一般化は英語特有の制約によるものと考えるべきであり、伊藤・杉岡 (2002)によれば、現代英語の場合では事象名詞を作る接辞-ing が行為やプロセスを表す意味に特定されていることによって、非対格動詞による複雑事象名詞が形成できなくなっていることが原因だと考えられる。

主要部が 3 項動詞の場合についても、Selkirk の一般化に反して日本語では(7)のように多くの複合名詞がある。しかも、(5)に従えば、主要部の項はすべて複合語内で満たされねばならず、複合語の内と外とで基体動詞の項が具現することは禁じられるはずであるが、日本語では、(8a)のように、場所項と結合して形成された複合語が語の外部に対象項をとることも、(8b)のように、対象と結合した複合語が語の外部に場所項を表すことも許される。

(7)　箱詰め、棚上げ、船積み、陸揚げ、車庫入れ、味付け、色付け、灰汁抜き

(8) a. みかんの箱詰め、問題の棚上げ、トラックの車庫入れ

b. スープの味付け、布地の色付け、山菜の灰汁抜き

このような事実は、日本語では動詞の項の具現化が英語ほど厳格ではなく、文脈から補うことができればすべての項を表さなくても容認されるということに帰すことができるかもしれないが[2]、ここで注意すべきは、これらの複合名詞が「する」と直接結合して動詞としても用いられることである。他動詞とその目的語が結合してできている複合語の場合は、

[2] 英語では、*Put on the shelf./*Put your bag.のように項の省略は許されないが、日本語では文脈から補えるなら可能である（「棚に置いてください」「バッグを置いてきてください」）。

「*花見する」「*宝探しする」のように直接「する」を付加することが難しく、かろうじて容認される場合でも「*お父さん｛に／を｝靴磨きする」「*旧友｛に／を｝墓参りする」のように項をとることはできないのに対して、(7)のタイプは(9)のように「する」と結合して外部に項をとることができる。すなわち(8)はその名詞化であることが明らかである。

(9) a. みかんを箱詰めする、問題を棚上げする、トラックを車庫入れする

b. スープに味付けする、布地に色付けする、山菜を灰汁抜きする

(9)の用法、すなわち、動名詞としての用法が確立しているものでなければ、(8)のような語の内と外にまたがった項の具現化は原則として容認されないことにも注意されたい。

(10) a. 問題を棚上げする→問題の棚上げ, *本を棚上げする→*本の棚上げ

b. 穀物を蔵入れする→穀物の蔵入れ, *着物をたんす入れする→*着物のたんす入れ

c. 皿に色付けする→皿の色付け, *下絵に色塗りする→?下絵の色塗り

d. 山菜を灰汁抜きする→山菜の灰汁抜き, *お風呂を水抜きする→?お風呂の水抜き

Sugioka (2002) によれば、この動名詞として用いられる複合名詞の多くは動詞の意味を修飾する付加詞が結合したものであり、むしろ基体動詞の項はすべてが語の外部で具現される。しかし、Yumoto (2010)で指摘したように(9)のように項の一つが複合語内で満たされ残りの項をとる動名詞が形成される場合もある。どのような条件を満たせば複合名詞が「する」と直接結合できる動名詞として成立するのかについては、Yumoto (2010)、由本 (2014)で詳しく論じたのでそれらを参照されたいが、平たく言えば、語の外に表すべき項を受けついでいることが動名詞として成立するための第一の条件であると言うことができる。

以上のことから、日本語の動詞連用形がその項と結合し叙述関係によって解釈される複合名詞には、もともと事象の名づけとして形成されているものと、行為を表す動名詞がまず形成され、それをもとに名詞化が適用されている場合との 2 種類があることがわかる。日本語には英語にはない、動詞として機能できる複合名詞の形成が可能なため、動詞由来の事象名詞が非常に豊かであり、また、一見英語では許されない語の内部と外部にまたがった項の具現が可能となっているのである。裏返せば、複合名詞を主要部の項構造あるいは LCS を基盤とした叙述関係によって解釈する場合についても、この二つの道筋があり、母語話者はそれを柔軟に使い分けていると考えるべきであろう。

4. タイプシフトを介した意味解釈

英語では、[X+V-ing] 型や [X+V-(a)tion] 型の事象を表す複合名詞だけではなく、具体物を表すものとして [X+V-er] 型の複合語も動詞の項構造を受け継ぐ動詞由来複合語の一種だと考えられている（cf. Selkirk 1982:23 など）。この型の複合名詞のほとんどは動作主または道具を表す名詞であり、そのことは接尾辞-er によって明示的に表されている[3]。これに対して日本語の具体物を表す複合名詞には、そのカテゴリーを明示する要素を含まず動詞

[3] 先行研究によれば、基体動詞の項構造を受け継いでいる動作主名詞は、正確には、指示対象として動詞の外項にあたるものを表すと考えられている。（cf. 伊藤・杉岡 2002:33）

連用形を主要部とするものが非常に多く、しかもその意味は非常に多様性に富んでいる。

(11) a. 動作主：相撲とり、絵描き、羊飼い、物取り、船乗り、金貸し、音頭取り

b. 道具：ねじ回し、霧吹き、栓抜き、髭剃り、水かき、爪切り、鉛筆削り、日よけ

c. 場所：車寄せ、ゴミ溜め、物置き、洋服掛け、箸置き、水入れ、小銭入れ

d. 時間：夕暮れ、夜明け、週明け、夜更け　　（cf. 伊藤･杉岡 2002:111）

e. 産物$_1$：水たまり、人だかり、日だまり、地割れ

f. 産物$_2$：卵焼き、たこ焼き、あら煮、鶏の**唐揚げ**、野菜の**油炒め**、サンマの**灰干し**、大根の**千切り**、玉ねぎの**酢漬け**、アスパラの**牛肉巻き**

直感的には、これらの意味は、基体動詞の項構造または LCS を基盤としていると感じられるが、どのようにしてこのように多様な解釈が区別されているのか、またどのような解釈メカニズムが働いているのかを説明するのは容易ではない。本稿では、由本(2015:90-103)で示した分析をもとに、これらの具体物解釈には、2 節で見た修飾関係や 3 節で見た叙述関係による解釈とは異なるプロセスが含まれており、基体動詞の LCS やクオリア構造からの情報を利用した強制によるタイプシフトを介した解釈によっていることを述べたい。

まず、動作主、道具を表す場合である。これらは、原則として 2 項動詞を基体としており、内項を語の内部で満たす形で複合しているので、形としては 3 節で扱った項構造を基盤とした事象や行為を表す名詞と同様の条件を満たしている。両者が違っている点は、指示対象として事象項が選ばれているか、あるいは基体動詞の意味構造に含まれていて複合語内では満たされていない具体物が選ばれているかという点である。由本(2015)では、動作主名詞と道具名詞はいずれも基体動詞の意味がクオリア構造の目的役割に代入されているという点で共通であることを述べたが、解釈メカニズムの観点からは両者は異なっている。まず、動作主名詞は基体動詞の外項に対応し、それが表す役割や職業を意味する。これは、項構造を基盤として考えれば、3 節で示した条件に従って語の内部で内項を満たし、満たされずに残された外項の方は、複合語の指示対象として受け継がれていることを意味する。図示すれば(12a)のように表すことができる[4]。3 節で扱った事象を表す複合名詞の場合については、(12b)のように基体動詞のイベント項にあたるものが指示対象として受け継がれていると考えることもできるので、複合語内では満たされていない項を指示対象として選ぶという意味では、動作主名詞と事象名詞の解釈メカニズムは軌を一にするとも言えるが、(12a)において複合名詞の指示対象となっているのは動詞の項としての動作主そのものではなく、その行為を成すことを目的とした人物や職業なので、事象解釈とは根本的な違いがあることには注意しなければならない。

(12) a.　描く　<Ev, $\underline{Ag}_i$, Th_i>

動作主の職業：　**絵**$_i$描き　<$\underline{R}_i$>　）

b.　釣る　<Ev, $\underline{Ag}$, Th>

行為：　**魚**$_i$釣り　<$\underline{R}_i$>

[4] 項構造を<　>内に表している。外項を下線を引くことで区別している。名詞の指示対象は Williams (1981)に従い R と表している。

文脈次第で、原則、いずれの解釈も可能であるのはこのことによるのだと考えられる。たとえば、「絵描き」は人の職業を表す名詞として定着しているが、「雨の日は（お）絵描きをして過ごした」のような文では行為の意味として解釈可能である。また、「アユ釣りは楽しい」のような事象解釈が一般的かもしれないが、「この川にはアユ釣りが多い」のような文脈では動作主として用いられ得る。

いっぽう、道具名詞の場合は、動詞と非主要部に表されるその対象項とによって表される行為に関わる世界知識、すなわちクオリアに記された情報をもとに、項構造には存在しない手段や道具を指示対象としている[5]。たとえば、「爪切り」であれば、「爪を切る」という行為に必須の道具があるという母語話者の知識がその解釈を正しく導いている。この場合も、動詞が表す行為において実際に道具として用いられたものを指すのではなく、それを典型的目的として作られているものを表すという点では、上で見た動作主名詞と同様である[6]。道具名詞は製品の名づけとして定着している場合が多く、その場合はレキシコンに登録されていて、規則に基づく解釈が働くことはないと考えられるが、仮に初めて耳にする複合語である場合は、事象か具体物か、いずれを指示対象として解釈するかは、文脈次第であり、上で見た動作主名詞と同様、すでに道具名詞として定着している場合でも「今日は爪切りに 10 分もかかった。」のような文脈においては事象としての解釈が可能である。

以上のことから、2 項動詞が内項と複合している複合名詞の場合、デフォルトは動詞と項の意味合成による事象解釈だと思われるが、文脈において適切な解釈が得られない場合は、動詞の項構造とクオリアを利用した「強制」(coercion) (cf. Pustejovsky 1995) によって、具体物解釈へのタイプシフトが起こっていると考えることができる。

つぎに、場所を表す複合名詞については、由本(2015)で指摘したように、基体動詞が 3 項動詞で対象項と結合しているものと見なすことができ、単に複合名詞が表す事象が起こる場所（すなわち付加詞）を表すものではない[7]。(11c)に挙げた例の中には、伊藤・杉岡(2002)では道具名詞の例とされているものもあるが、それらも 3 項動詞の場所項であり、解釈メカニズムの観点からは先述の道具名詞とは異なるタイプと見なすべきである。このタイプは、3 節の(5)の条件には適合しないが、基体動詞が選択する二つの内項のうち一つを複合語内で満たし、残りの項を指示対象にしている。したがって、(12)と同様の項構造を基盤としたメカニズムが想定できる。これを図示すると(13)のようになる。

(13)　置く　$<Ev, \underline{Ag}, Th_i, Loc_j>$

場所：　**物**$_i$ 置き　$<R_j>$

ただし、このタイプについては、内項の一つしか複合語内で満たされていないので、3 節

[5] 詳しくは、由本(2015)を参照されたい。

[6] したがって、複合名詞のクオリア構造では目的役割として複合名詞が表す行為が記されることになる。

[7] たとえば、「石を切り出している場所」を表すのに「石切り」とは言えず、「石切り場」のように場所を明示する語尾が必要である。

で扱った叙述関係による解釈の条件には適合せず、事象としての解釈と二義性が生じる可能性は低い。あるとすれば、先述の「色付け」「灰汁抜き」のような、「する」が直接結合し得る動名詞の名詞化である。動名詞として定着していない「対象項＋｛入れ／置き｝」は事象の意味では容認されにくく、これらのデフォルト解釈は場所である[8]。

次に産物を表すと考えられる複合名詞の解釈メカニズムを考えてみよう。まず、(11e)に挙げた「水たまり」などの例は、内項と非対格自動詞の結合によるものである。この場合は、自然現象を表す(6c)に挙げた複合名詞と形の上では同じである。また、「たまる」「たかる」については、「水が穴にたまる」「蟻が砂糖にたかる」のように主語以外に場所項を取る用法があるため、一見、上記(13)と同様に動詞の項構造内で満たされていない項が選ばれるという、項構造を基盤とした解釈のように思われるかもしれないが、実際の指示対象を考えると少し異なっている。たとえば、「水たまり」「人だかり」は水がたまっている、あるいはたまるべき場所、人がたかる、またはたかりそうな場所というよりも、水がたまったり人がたかったりした結果、生じた物・状況を表している。「地割れ」も同様で、地面が割れて初めて生じるものが「地割れ」である。すなわち、これらは、非対格動詞と内項の結合によって表された自然現象によって生じる産物を指しているのである。このような産物解釈は、動詞の項構造や LCS ではなく、複合名詞が形成されてその解釈が得られた段階で世界知識を利用して導かれているものである。すなわち動詞と名詞のクオリアが合成され、複合名詞全体のクオリアが形成されて初めて可能になる解釈だと言える[9]。

いっぽう、同じ産物解釈でも、他動詞を主要部とするものについては、少し異なる解釈メカニズムが関わっているものがあると考えられる。一つは、「卵焼き」「たこ焼き」「あら煮」のような基体動詞が作成動詞の用例も持ち、材料だと解釈できる目的語と結合している場合で、自動詞の場合とほぼ同様の分析が適用できる。しかし、同じ意味関係でも「焼き芋」「煮豆」「揚げパン」のように材料を主要部とする逆の語順で表されるほうが普通であり、動詞連用形を主要部とする複合語は、料理名として語彙化しているものに限られている。そうでない場合は、内項と結合していることから、事象名詞（「芋煮」＝芋を煮ること）として解釈されるのがデフォルトである。

もう一つのタイプは、「大根の千切り」「野菜の油炒め」のように、行為の様態や手段を表す名詞と結合している場合で、(11f)で示しているように材料に当たる名詞を修飾要素として複合語の外に表さなければ意味が完結しないものである (cf. Kageyama 2001)。「昼ご飯に焼き芋を食べた」はそれだけで完結するが、「昼ご飯に油炒めを食べた」は文脈なしでは容認しにくい表現である。このことは、このタイプの複合語が純粋な名詞ではなく、項を

---

[8] 運動会の競技名「玉入れ」の他、『広辞苑』には「足入れ」「火入れ」「名入れ」「墨入れ」なども掲載されているが、これらはいずれも現代では広くは用いられない語である。

[9] たとえば、単に「たまる」という動詞のクオリアに、項として名詞「水」のクオリアを共合成するだけで、「水たまり」の実際の意味が導かれるとは思えない。動詞と名詞の共合成の後、さらにそこから得られる世界知識が利用されていると考えられる。これを形式化するには、かなり複雑な意味解釈メカニズムが必要となるように思われる。今後の課題としたい。

要求する複合名詞を基盤としていることに帰される。すなわち、「油炒め」とは何か食材を油で炒めたもの、「千切り」とは何かを線状に細切りにしたもの、という意味であるから、その「何か」が表されないと未完結な表現になってしまう。しかしこのタイプの複合名詞は、「する」と直接結合する動名詞とは限らない。むしろ、伊藤・杉岡 (2002:120ff.) によれば、「だ」と結合して結果を描写することができる述語名詞が基盤となっていると考えるべきである。伊藤・杉岡によれば、このタイプの複合名詞は原則として基体動詞の LCS を基盤として作られる。そこで、由本 (2015)では、このタイプの複合語を産物名詞として解釈する際には以下のようなプロセスが想定されると考えた[10]。

(14)　大根を[千切り]$_{+V}$にする→大根の[千切り]$_{-V}$（にしたもの）

野菜を[油炒め]$_{+V}$する→野菜を[油炒め]$_{+V}$にする→野菜の[油炒め]$_{-V}$

(14)では、このタイプの産物名詞が結果状態を描写する述語名詞が基盤となっており、動名詞として「する」と直接結合できるものもいったん結果状態を描写する述語名詞に転換し、同じプロセスを経て産物解釈が得られることが示されている。このタイプも料理を表すものが多いが、「ネクタイの蝶結び」「画用紙の四つ切」「イモリの黒焼き」のように[材料-の [結果状態＋動詞連用形]] という型に従っていれば料理名以外でも用いられているので、ある程度生産性のある語形成だと考えられる。

ここで注意すべきは、(14)において想定されている、統語範疇の変換に伴った状態の描写から具体物へのタイプシフトが、先述の「爪切り」のような例とは異なり、修飾要素として材料、すなわち基体動詞の対象項にあたる名詞が共起しているという環境が整った場合にのみ可能となる点である。実際の使用において修飾部がない例も見られるが、それらは文脈から対象項が補われている場合に限られている。従って、このタイプの産物解釈は、複合名詞単独ではなく、句レヴェルで考えられなければならない。この点から(14)のプロセスをより明確にする代案として以下のようなメカニズムを提案したい。まず、複合名詞が形成された段階では統語範疇も意味範疇も叙述機能をもつカテゴリーとして成立しており、項として働きかけの対象を要求するものと指定されている。したがって(15a)のようなコピュラ文、(15b)のような状態変化使役構文では対象項と共起することでその結果を描写する述語名詞としての機能を発揮する。(15c)のような名詞の修飾要素として現れる場合も、その名詞が対象として解釈できる限り、述語名詞（村木新次郎氏によれば「第三形容詞」）としての機能をもつ。いっぽう、(15d)のように複合名詞が主要部の名詞句を作り、その名詞句内に対象項が現れている場合は、2 節で扱ったものと同じ事象名詞となる。さらにそれが(15e)のように具体物を表すと考えられる環境に現れる場合、事象解釈から産物解釈へとシフトするのである。これはちょうど「あら煮」のような例が基体動詞の項と結合することで語内部で項を満たし、事象名詞としての解釈を得ていながら、環境によっては具体物も表すというのと同じである。

---

[10] 由本(2015)では、統語範疇を+N として示したが、述語名詞もあくまでも名詞としての統語的性質を有しているので、これは不適切であり、本稿では修正した。

(15) a. 刺身のつまに使う大根は千切りだ。　b. 大根を千切りにする。
c. 千切りの大根　d. 大根の千切りに 10 分もかかった。
e. 大根の千切りを刺身のつまにする。

本節で扱った様々なタイプの複合名詞の具体物解釈について論じている Kageyama (2001)は、日本語は non-bounded な言語であるため bounded な具体物解釈を得るには形態的手段を用いるのだと論じているが、形態的に変化がなくても(15)に示すようなタイプシフトは起こる。具体物解釈を導くメカニズムは形態的なものというより、共起する要素によっては潜在的に可能な解釈であり、それが文脈によって強制によって導かれるというべきだと考えられる。本稿で提案した分析では、語の解釈の決定が句レヴェルにまで持ち越されることが許されることになるが、日本語のように語の統語範疇が語尾によっては必ずしも明示されない言語においては想定せざるを得ないメカニズムだと考えられる。

５． 結語

本稿では、日本語の複合名詞の意味について、修飾関係と叙述関係による複合はクオリア構造と項構造を基盤とし、二つの語の関係から語内部で決定できるものであるのに対して、LCS と項構造を基盤としながらも文脈に従って合成された意味を世界知識に照らして再解釈し、柔軟に指示対象をシフトするメカニズムも存在することを示した。また、句レヴェルにまで持ち越して複合語の解釈を決定する必要がある場合もあり、日本語の複合名詞の多様性はこのような柔軟なタイプシフトによるものであることが明らかになった。

主要参考文献

Grimshaw, Jane. 1990. *Argument Structure.* Cambridge, The MIT Press,　伊藤たかね・杉岡洋子 2002.『語の仕組みと語形成』研究社,　Johnston, Michael and Federica Busa. 1996. Qualia structure and the compositional interpretation of compounds. In V. Evelyne (ed.) *Breadth and Depth of Semantic Lexicons*. 167-187. Kluwer,　Kageyama, Taro. 1985. Configurationality and the interpretation of verbal compounds, *English Linguistics* 2, 1-20, 影山太郎 1993.『文法と語形成』ひつじ書房,　影山太郎 1999.『形態論と意味』くろしお出版,　Kageyama, Taro. 2001. Polymorphism and boundedness in event/entity nominalization. *Journal of Japanese Linguistics* 17, 29-57,　Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. The MIT Press, Selkirk, Elisabeth O. 1982. *The Syntax of Words*. The MIT Press, Sugioka, Yoko. 2002, Incorporation vs. modification in Japanese deverbal compounds. *Proceedings of Japanese/Korean Linguistic Conference 10*, 496-509, Yumoto, Yoko.2010. Variation in N-V compound verbs in Japanese. *Lingua* 120, 102388-2404,　由本陽子 2015.「「名詞＋動詞」複合語の統語範疇と意味的カテゴリー」益岡隆志（編）『日本語研究とその可能性』80-105, 開拓社.